

EDINETタクソノミの構造と課題

坂 上 学

一 はじめに

金融庁が運用するEDINET (Electronic Disclosure for Investors' Network) は、わが国の証券市場に上場する企業の有価証券報告書をはじめとする種々の開示書類を、電子媒体によって提供をおこなう電子開示システムである。二〇〇〇年五月の証券取引法（現金融商品取引法）の改正により、従来は紙媒体によってのみ行われていた有価証券報告書等の書類の提出・受理といった一連の手続を、電子情報処理組織を用いて行うことが可能となった。この電子情報処理組織を具体的に実現したものがEDINETである。二〇〇八年三月に金融商品取引法施行令が改正され、それに伴って二〇〇八年三月一七日よりEDINETは新システムへと移行し、二〇〇八年四月より始まる年度の決算から提出書類の財務諸表部分については、XBR L形式による提出が義務化されることとなった。

XBR L形式の財務諸表データは、インスタンス文書 (instance documents) と呼ばれる。このインスタンス文書は、対応するタクソノミ (taxonomy) と対で利用しなければ正しく利用することができない。当然ながらEDINETにおいても、新システムへの移行に合わせて専用のタクソノミが開発され、EDINET

のwebサイト上で公開されている¹⁾。しかしながら財務諸表データのXBR L化はまだごく限られた範囲のみで始まったばかりであり、EDINETタクソノミも様々な課題を抱えている。今後さらに発展させていくためには、まずEDINETタクソノミの構造を理解し、何が実現されていて何が実現されていないのか、現時点で抱えている課題は何か、今後どのように展開しうるのか、といったことを明らかにする必要があるだろう。

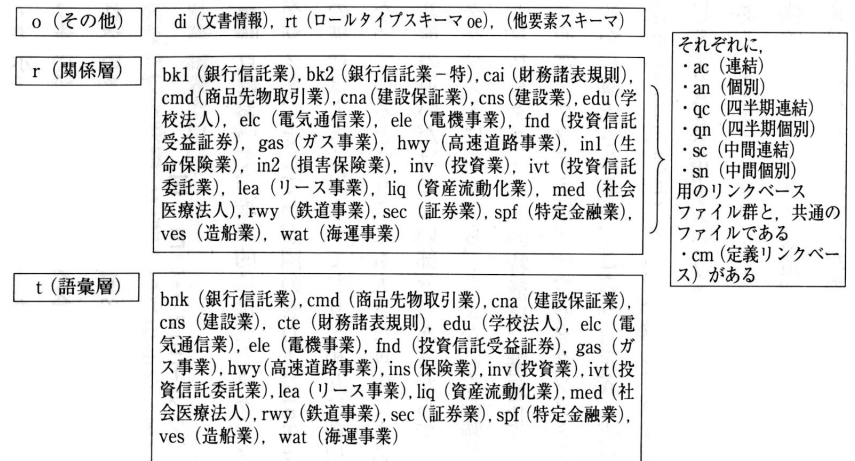
本稿では、EDINETタクソノミの構造として、語彙層と関係層とに分離したタクソノミの階層化、拡張層を設けることによる拡張タクソノミの標準化について、その特徴を理解した上で、現時点で存在する課題は何か、また今後どのように対応すべきかを議論することにした。

二 EDINETタクソノミの体系

現時点においてEDINETタクソノミが対象としている開示書類は、有価証券報告書・半期報告書・四半期報告書の三つである。それぞれの財務諸表（貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、キャッシュ・フロー計算書）の本体部分のみをカバーし、各財務諸表の注記や付属明細表は対象外となっている。また、内国会社のうちSEC登録企業など、米国式連結財務諸表を作成している会社の当該連結財務諸表についても対象外となる（金融庁二〇〇八）。またEDINETタクソノミは、一般的な商工業企業が利用するタクソノミを基本としながらも、各業界ごとに規制されている様々な関連法規が要求する開示項目を業種ごとにタクソノミが作成されているので、その体系は膨大なものとなっている。

EDINETタクソノミは、まず大きく三つのカテゴリに分類される。「語彙層タクソノミ」(t)と「関係層タクソノミ」(e)、そして「その他タクソノミ」(o)で、それぞれ一文字のアルファベットが割り当て

図1 EDINET タクソノミの体系



られている。語彙層タクソノミは、一般商工業用のタクソノミ (cte) など業種別に二二のタクソノミから構成され、それぞれ三文字のアルファベットが割り当てられている。また関係層タクソノミは、一般商工業用のタクソノミ (cai) など業種別に二四のタクソノミが用意され、語彙層と同様にそれぞれ三文字のアルファベットが割り当てられている。関係層タクソノミでは更に、それぞれの業種別タクソノミについて連結、個別、中間連結、中間個別、四半期連結、四半期個別の六種類の計算書類のリンクベース・ファイル群と、共通で利用する定義リンクベース・ファイルが用意される。その他タクソノミは、文書情報 (di)、ロールタイプ・スキーマ (rt) と、その他要素 (o) の二つから構成されている。

通常タクソノミは、一つのタクソノミ・スキーマ (taxonomy schema) と五つのリンクベース (linkbases) から構成される。リンクベースには、定義 (definition)、表示 (presentation)、計算 (calculation)、名称 (label)、参照 (reference) の五種類があるが、このうち語彙層タクソノミでは名称・参照の二つが設定され、関係層タクソノミでは定

義・表示・計算の三つが設定される。結果として、語彙層タクソノミでは一三〇個、関係層タクソノミでは四、五九〇個、その他タクソノミでは六個、総勢で四、七二六という膨大なファイル群からタクソノミが構成されている。このEDINETタクソノミの体系は、図1のように示される。

三 EDINETタクソノミの特徴

現時点において、世界的には三大タクソノミというものが存在する。IFRSタクソノミ、USGAPタクソノミ、そしてわが国のEDINETタクソノミである (XBRL International 2009)。それぞれのタクソノミの構造は大きく異なっており、相互に利用することは極めて難しい。タクソノミの背後にある会計基準が異なっているということも大きな理由であるが、タクソノミの設計思想や、関連法規との関係など、単に会計基準の違いだけでなく部分もあるからである。EDINETタクソノミの特徴を知るためには、他の二つのタクソノミについても、大まかにその特徴を知っておく必要があるだろう。

IFRSタクソノミの特徴は、階層化されたタクソノミをはじめて実装したタクソノミということである。通常タクソノミは、一つのタクソノミ・スキーマと、定義・表示・計算・名称・参照の五つのリンクベースから構成されるが、このうち定義・表示・計算の三つを関係層 (relationship layer)、名称・参照の二つを概念層 (concept layer) として分離している (International Accounting Standards Committee Foundation 2009)。

USGAP用タクソノミの特徴は、ディメンション (dimensions) と呼ばれる機能を取り入れている点である (Hoffman 2006)。このディメンションとは、ある情報を細分化した未集約データを格納するために、立体的なマトリックス構造でデータを記述するための追加仕様である。USGAPタクソノミでは、セグメント情報を記述するためにディメンションを採用しており、このことが大きな特徴となっている。

わが国のEDINETタクソノミは、金融庁によって開発されたもので、後発の強みを生かし巧妙に練り上げられたものとなっている。EDINETタクソノミを特徴づけているものとして、筆者は次の二点を指摘したい。

一つは、IFRSタクソノミと同じく、タクソノミを階層化するというアプローチを採用したことである。EDINETタクソノミの場合、語彙層、関係層、企業別拡張層という三つのレイヤー構造となっているが、このうち語彙層とIFRSタクソノミの概念層は同じものと考えてよい。すでに前節のEDINETタクソノミの体系のところで紹介しているとおり、語彙層タクソノミには名称・参照の二つのリンクベース、関係層タクソノミには定義・表示・計算の三つのリンクベースが設定されている。もう一つの特徴は、企業別拡張層というレイヤーの提出を強制することにより、拡張タクソノミの扱いを標準化している点である。以下において、EDINETタクソノミのこれら二つの特徴について、もう少し詳しく検討する。

四 タクソノミの階層化

EDINETタクソノミでは、タクソノミの階層化をおこなっているが、その理由は、一言で言えば計算書類別や業種別に異なる様式の財務諸表に対し、効率よく対応できるようにするためである。

財務諸表で用いられる勘定科目や報告項目（これらをXBRLでは財務コンセプトと呼ぶ）は、業種や計算書類が異なっても共通して用いられるものも多く、参照すべき会計基準や財務諸表上での表示名称が大きく異なることは少ない。これに対し、財務諸表の項目の配列は、業種によって異なる場合がある。たとえば一般の商工業の企業は流動性配列法を用いるが、電気業・ガス業の企業は固定性配列法を用いるなどはその典型であろう。また計算書類によっては表示区分などの様式も微妙に異なっている。業種ごとに、あるいは計算書

類ごとに、それぞれ五つのリンクベースすべてを用意することは無駄が多く、異なる部分が少ない名称・参照の二つのリンクベース部分を分離して共用することにし、異なる部分が大きい定義・表示・計算リンクベースについてのみバリエーションを用意する、すなわちタクソノミを階層化するというアプローチを採用するのはごく自然の流れでもある。

技術的にみても、財務コンセプトを定義するタクソノミ・スキーマとリンクベースとの関係について、語彙層と関係層とに分離する意義を見いだすことができる。名称・参照リンクベースでは、財務コンセプトから表示名称や参照情報といった外部リンクベースへ一方向的にトラバースをおこなうという振る舞いをする点において共通している。これに対し、定義・表示・計算の各リンクベースでは、財務コンセプトから各リンクベースへとトラバースし、そこから項目間の関係を記述した親子関係の情報や属性値（表示順であればorder属性の値、集計方法であればweight属性の値）を取得したあと、再び財務コンセプトへとトラバースして戻るという再帰的な振る舞いをする点で共通している⁽³⁾。更に、定義・表示・計算の各リンクベースに記述される項目間の親子関係の情報についてはまったく同じであるため、これらを共通化しさらに冗長性を省くといった工夫を行うこともできる。実際、EDINETタクソノミでもそのように実装されている。

なお、EDINETタクソノミでは、語彙層タクソノミと関係層タクソノミのほかに、企業別拡張層タクソノミという三つめのレイヤーが存在する。この企業別拡張層タクソノミは、金融庁が開発したEDINETタクソノミの中に含まれておらず、EDINETに開示書類を提出する企業が各自で作成し、XBRL形式の財務諸表データ（インスタンクス文書）とともに提出するものである。EDINETタクソノミを構成する不可欠な要素ではあるが、語彙層タクソノミおよび関係層タクソノミとは、その趣を大きく異にしている点に注意しなければならない。この企業別拡張層を含む階層化されたEDINETのタクソノミ・フレームワ

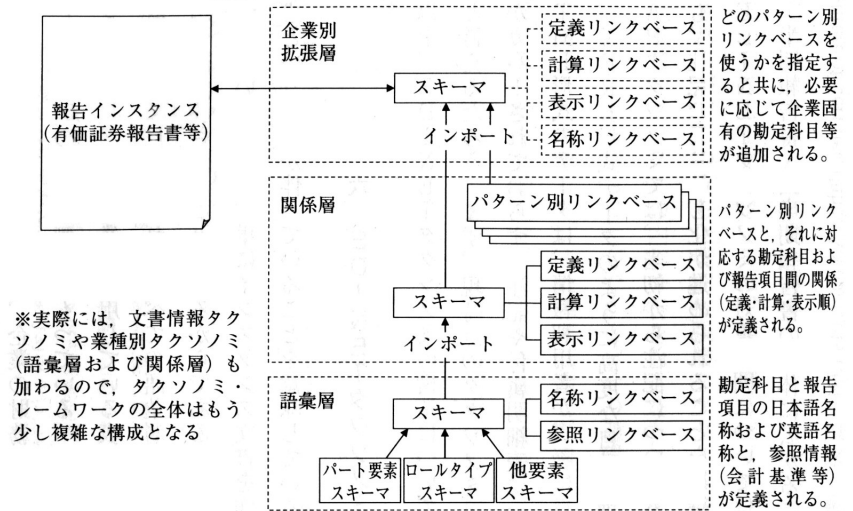
以上、EDINETタクソノミの構造について見てきたが、その中で現在抱えている課題が明らかになつたと見えるだろう。まず、現時点のタクソノミ(二〇〇八年二月一日バージョン)では、財務諸表本体部分のみしかカバーされておらず、注記や付属明細表については従来のHTML形式のデータを参照するしかない。HTML形式のデータは、情報利用者が実際に自分の目で見て確認するという使い方を暗に想定しているため、XBRL形式データのように高度な自動処理をコンピュータにおこなわせることができない。USGAPタクソノミでは、当初から注記についてもXBRL化がなされており、今後EDINETタクソノミでも、注記のXBRL化が進められることを期待したい。

EDINETタクソノミの対象範囲については、単に財務諸表部分だけでなく、将来的には有価証券報告書・半期報告書・四半期報告書の全体に広がることも期待したい。これは、ジェンキンス報告書(American Institute of Certified Public Accountants 1994)以来、議論が続けられているEBR(Enhanced Business Reporting)の

六 EDINETタクソノミの課題と今後の展望

企業別拡張層タクソノミは、企業の財務諸表がどのようにして作成されているのか、その構成要素などを示した設計図のような側面をもっている。なぜならば、当該企業が所属する主たる業種のタクソノミ・スキーマを選択し、当該企業が採用している表示様式を表すパターン別リンクベースを選択し、当該企業が用いた財務諸表項目が書かれたすべての語彙層タクソノミを選択し、さらには当該企業が独自に拡張したすべての項目が定義されることになるからである。つまり、EDINETへのXBRL形式の財務諸表データを作成するということは、単にインスタンス文書を作成するというだけでなく、この企業別拡張層タクソノミの作成という作業が伴っていることを意味しているのである(5)。

図2 EDINETのタクソノミ・フレームワーク



1クの全体像は、図2に示されたとおりである。

五 企業別拡張層の役割

EDINETタクソノミのもう一つの特徴は、企業別拡張層というレイヤーを設け、その提出を強制した点にある。これにより拡張タクソノミの扱いが標準化されることになる。

拡張タクソノミの扱いを標準化したメリットは大きい。たとえばIFRSタクソノミやUSGAPタクソノミでは、拡張タクソノミの作成は提出する企業の自由に委ねられている。あまりにその自由度が高すぎるため技術的なミスを誘発しやすくなるおそれがある(4)。全ての市場企業が、各社各様に独自の拡張タクソノミを作成するとすると、大きな混乱を招くことは想像に難くない。EDINETのアプローチでは、最初に拡張タクソノミの作成を強制し、ファイル名から名前空間の設定に至るまで標準化されているため、タクソノミの拡張に伴う混乱を最小限に抑えることに成功しているといえるだろう。

XBR L化という流れにも通じる。非財務情報と財務情報との関係を分析することも容易になり、分析が進むことにより新たな知見が得られる可能性がある。

EDINETタクソノミは、語彙層、関係層、企業別拡張層タクソノミという三つのレイヤーによって構成されるが、このうち企業別拡張層タクソノミからは、多くの情報もたらされることになるだろう。企業別拡張層タクソノミの内容分析をおこなうことによって、企業はどのような語彙（財務諸表項目）を拡張しようとしたのかを知ることができる。その過程で、企業活動の多様化や産業構造の変化の兆候を読み取ることができかもしれない。また関連法規に基づいて開示された内容として、どのような項目が、どの程度存在しているのかを詳細に分析することもできる。これは会計関連法規の実際の運用状況について棚卸しをおこなっているのに等しく、将来の制度設計のための基礎資料として大きな意味を持つことになるだろう。

注

- (1) EDINETタクソノミと各種ガイドラインは、金融庁のWebサイトの「EDINETタクソノミ (2008-02-01版) の公開について」(<http://www.fsa.go.jp/singi/edinet/20080208.html>) のページより入手ができる。
- (2) USGAPタクソノミでディメンションの利用については、Hoffman (2006) の第一四章に詳しく、USGAPタクソノミそれ自体については、US Securities Exchange Commission (2009) を参照せよ。
- (3) タクソノミの技術的な側面を理解するためには、坂上・白田編 (二〇〇三) の第五章以降や石綿 (二〇〇八) などを参照せよ。
- (4) タクソノミの拡張は、XML技術に精通していない場合には、様々な困難に直面することになる。その典型的な一例は、拡張タクソノミの名前空間をどのように設定するかという問題である。名前空間を適切に設定できなければ、インスタンス文書と拡張タクソノミとの対応関係が発見可能 (discoverable) なものとならず、インスタンス文書を扱う局面で様々な不具合をもたらすことになってしまう。

- (5) EDINETに提出するXBR L形式の財務諸表データの作成には、このように複雑な作業を伴う。これらを網羅的に解説したものととして、筏井 (二〇〇九) を挙げることにする。

引用文献

- American Institute of Certified Public Accountants (1994) *Comprehensive Report of the AICPA Special Committee on Financial Reporting*. AICPA. (八田進一・橋本 尚訳 (二〇〇一)) 『事業報告革命—アメリカ公認会計士協会・シエンキンス報告書—』白桃書房)
- Charles Hoffman (2006) *Financial Reporting Using XBRL: IFRS and US GAAP Edition*. Lulu.com. (なお本書の電子版は、<http://trux.wikispaces.com/4り入手が可能>である)
- International Accounting Standards Committee Foundation (2009) *IFRS Taxonomy Guide*. IASB. (なお本サイトの電子版は、<http://www.iasb.org/XBRL/Resources/IFRS+Taxonomy+Guide.htm>) よりダウンロードする(2010年9月29日現在)
- US Securities Exchange Commission (2009) EDGAR Standard Taxonomies. (<http://www.sec.gov/info/edgar/edgartaxonomies.shtml>)
- XBRL International (2009) *Comparison Framework for EDINET, IFRS, and US GAAP XBRL Taxonomies 0.05-Public Working Draft 31 March 2009*. URL: <http://www.xbrl.org/TCF-PWD-2009-03-31.html>.
- 筏井大祐 (二〇〇九) 『XBR L財務諸表の作成ガイドブック—EDINET対応—』中央経済社。
- 石綿 勇 (二〇〇八) 『XBR Lの実務—会計実務のためのXBR L入門—』同友館。
- 金融庁 (二〇〇八) 『新EDINET利用にあたっての留意点』URL: <http://www.fsa.go.jp/search/20080304-1.html>
- 坂上 学・白田佳子編 (二〇〇三) 『XBR Lによる財務諸表作成マニュアル』日本経済新聞社。

(筆者・法政大学教授)